



日々好日

六六一号

(令和六年三月発行)

寺報の先月号で、能登半島地震の被災の現状を目にしながらも手をこまねていることを悔やんでいると記しましたが、老いてもまだ出来ることがありました。義援金の募集である。

初観音を前にして募金箱を本堂に設置。それは節分の星祭りの日まででしたが、少ない参詣者数の割には萬札も目に付き思いを上回る義援金が集まりました。

高野山からも協力の依頼があり二月五日に本山に送金させていただきました、

こうした慈悲心あふれる人達がある反面、私には苦い思い出があります。それは一九九〇年の雲仙普賢岳の大火砕流の際、五〇才の時で対応も早くその日のうちに義援金箱を本堂に置きました。

それははじめてのことで多くの檀信徒の協力をいただきました。ところがその募金箱ごと盗まれるという大失態をしてしまったのです。予想だにしない出来事に憤りよりも心無い所業を悲しんだことでした。

お寺で義援金相当額を補填したことは勿論のことですが、その後も阪神淡路大震災、東日本大震災などでも義援金を募りましたが、先の失態が頭をよぎるのは教訓としつつも、鬼のような人の存在を未だ忘れられないのは口惜しいことである。

■弘法大師のお言葉

「佛心とは慈と悲なり。大慈はすなわち樂を与え、大悲はすなわち苦を抜く。抜苦は軽重を問うことなく、与樂は親疎を論ぜず」(性靈集巻第六)



日々好日

大慈はすなわち樂を
与え、大悲はすなわち苦を
抜く。



当山の節分星祭

当山の星祭はコロナ感染の前までは午後七時より執り行っていました。近年は午後二時よりつとめていきます。当初は面映ゆい思いもありましたが、参詣者の多くが高齢者であり時間変更に賛同していただいたことで胸をなでおろしたことでした。

今年雨の予報が出ていましたが雨は夕刻からでした。しかし、季節通りの寒い日でした。

本尊のお厨子の前に星曼荼羅の軸を掛け、その手前の前机に当年星・本命星・元辰星の幣帛を立てその後ろに能勢妙見と焼き印のある厨子入りの妙見尊を祀ります。



壇上には天仙愛好の柑橘、茶、洗米、紙銭、豆等を供え、供花には菊花などに加え松、梶子、木犀など星供なれではのもも用意します。

星供次第を修し終えて護摩を焚きます。今年は金輪護摩でしたが、妙見護摩、北斗護摩も焚いています。これが可能なのは護摩全集全六十五巻を備えているからです。星祭りは真言宗寺院だけでなく神社でもつとめられています。その内容は似て非なるものであることは当然のことですが、真言宗のそれは本命星供と当年星供を併修

することが慣わしですが、可能な限り高野山の中院流星供を務めたいと思っています。

と言うのは、当年星の繰り様が他山のそれと異なる点です。当山のそれは「中院流の研究」(大山公淳著)四九一頁にあるように「男はラゴウ星を生まれ年にあてて次第に繰り、女はケイト星を生まれ年として出す。よって男一歳はラゴウ星にして十歳またラゴウ星。女は一歳ケイト星にして十、十九歳はケイト星となり、以下この順に押し知ること」と、八葉学会本「中院流星供」をひいて説明があります。

この中院流星供の説明に順応する星供次第を当山では古くから用いています。その次第に「九星順飛吉凶之例」が示され先の説明の通りであります。そしてこの男女別の繰り様について次のような説明があります。

・初心者に記す。九星順飛吉凶之例は次第の如く男子は羅喉星に始まり、女子は計都より始む。人生れて七歳未満は災厄なし。故に吉凶あることなし。古徳曰く世にはこの理由を知らざる人多しと。

星供では当年星の吉凶が一番の関心事であるはずなのに、男女でその繰り様が異なることを、本宗所属の先徳の星供に関する著作で私は寡聞にして知りません。

著名な布教師さんの法話集に「九曜星のなかで羅喉星・火曜星・計都星の三つの星が黒星で相撲に負けると黒星というのはここからでた言葉で、この悪い星の廻るってきた年を厄年とします。

一般に厄年とされている十九才、二十五才、三十三才四十二才、六十一才はみな黒星なんであります」と。

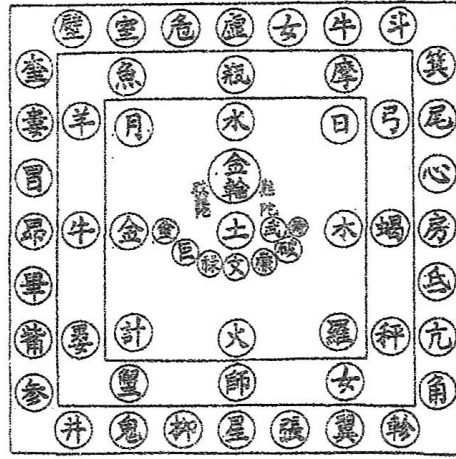
これにはがっかりしてしまいます。世間流布の厄年は宇宙の星とは何ら関係がないということを知りたこととす。因みに当山の九星表では女性の三十三才は黒星ではあ

りません。

「密教占星法」(森田龍僊著)には幾種類もの星曼茶羅が図示されています。それによれば当山のそれは第六図に相当します。

これは成就院寛助の創図と伝う。星曼茶羅は天歴年間に広隆寺寛空が北斗法を修した時に用いた曼茶羅をのちに成就院寛助が整備したものがこの星曼茶羅である。

中央に釈迦金輪、その一院に当年星である九曜を配し、金輪の下に本命星である北斗七星をおく。第二院には黄道上の十二星座、外院には白道上の二十八星座(宿)が配されています。



第六図

当山の曼茶羅の箱の蓋には、「星曼茶羅 一軸」とあり、内面には「為令法久住 利益人天 應需揮毫 僧正爾覚」とあります。

歳月を経た古い軸物でありながら、年に星祭りの節分の日だけかかげる軸なので色の退色もなく鮮やかで新品のごとき星曼茶羅です。これからも大事に護持していかねばならないと思います。

星祭りは中国の陰陽五行説や、占星術、道教の影響なども受けているという。そんな中でお大師様の伝えられた宿曜経に準拠した真言宗ならではの星供を執り行うこ

とで、檀信徒の方々がもろもろの災厄から逃れ平穏な日暮しができるように祈念させて頂くのは真言宗寺院の住職としての務めであり、慶びでもあります。

二十一世紀は良くも悪くも宇宙を意識しないではおけない時代です。月探査も資源確保や戦略的な面があるのは承知していますが、人類の破滅に繋がるようなことにならないことを信じたい。星空を仰いで、世界の指導者は度量の大きな人間になってほしいものです。

規律正しい星の運行のようにはいかないまでも、かけがえないこの地球を未来永劫に誰もの安住の地であることを、星供を修し立春の季に念じます。

私たちの居住する地球、その地球の属する太陽系も仰ぎ見る天の川つまり銀河系宇宙の一員だということであり、この銀河系は一千億とも二千億ともいわれる星の集団である。

そして宇宙は広大でこの銀河系のような星の集団が一千億も存在しているのだという。いくら想像をたくましくしても宇宙の広大さ奥深さは理解できることではありません。

この銀河系には太陽のように惑星をとまなう恒星が十億はあるであろうとされ、そのうち太陽と地球のような位置関係にある星は一億は存在するであろうという。

そんな星がいくらあろうとも光の速度で何万年もかかる距離、途方もなく遙か彼方なのです。人間が移住し宇宙服なしで生活できる星は皆無に等しい。

一日中、地平線下に沈むことのない北斗七星を本命星と仰ぎ、太陽系の星々を当年星として除災招福を年々祈念する星供をはるかな昔から営んできたのは人類の叡智ではなからうか。星に吉凶禍福をみるのは迷信宛らですが、星の影響を無碍に否定はできません。

大師信仰に生きる

大師信仰と言えば、他の宗派の教祖には見られない信仰である。日本の佛教は佛教とは言いがくも、各宗派の祖師の教えだと言つてもいいほどに偏狭なものになっていると言つたら言い過ぎであろうか。

その点、大師（空海）の教え真言宗は総合的な教えです。すからお釈迦様の教えを色濃く残しているといえるでしょう。

二五〇〇年の昔、お釈迦様は尼蓮禪河のほとりピツパラ樹の樹下で端座瞑想されお悟りを得られました。その悟りは自然法爾の道理を悟られたということです。

だから、それはお釈迦さまが造られたというようなものではありません。誰が造るといふようなものではなく始めもなく終わりもなくそこに儼然として存在しているものなのです。

それを大師は法身ととらえられました。この法身たる自然法爾の道理があるからこそ、それをお釈迦様は悟られ口説法されたのです。

つまり法身説法があるからこそお釈迦様は悟りをえることができたのであり、法身が人として身をあらわしたということになるのです。そして様々な人にその人に応じて適宜の法教を説かれたということになります。

お大師様もまた自然法爾法身のもとでその道理を自覚され、灌頂も受けられて自ら法身大日の境地に至られたということなのです。

仏と凡夫の違いは自然法爾の道理を自覚するかしないかの違いである。

「もし能く明らかに密号名字を察し、深く莊嚴秘藏を開くときは、即ち地獄、天堂、佛性、闡提、煩惱、菩提、生死、涅槃、辺邪、中正、空有、偏遠、二乗一乗、皆、佛の

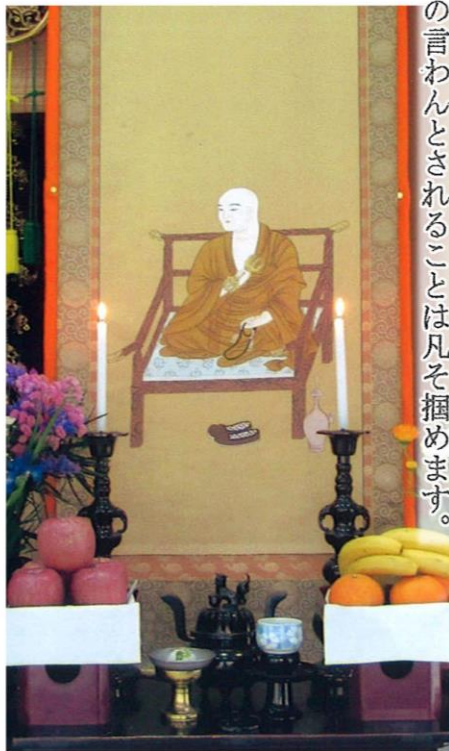
名字なり。焉れおか捨て焉れおか取らん」

この大師のお言葉には驚愕します。み心の大きさ深さを感じさせる素晴らしい見解である。法を誇る闡提も地獄も煩惱もみな自心佛の名であるというのです。

法身佛に等しい存在となられた大師の目からみれば何れを取り何れを捨てるかというような問題ではないのです。

お大師様の書かれた御文章は浅学の者には真意をすぐに理解することは叶いませんが、「読書百遍意自ずから通ず」ではありませんが、何となくお大師様の言わんとされること分かるようになります。

それは大変な誤解かもしれませんが、「衆生本来仏である」とか、「有形有識は必ず佛性を具す」と教えらるお大師様の教えならば一言一句は理解できなくてもその言わんとされることは凡そ掴めます。



「坐を起たずして金剛即ち我が心なり。三劫を経ずして法身すなわちこれ我が身なり」(大日経開題)

(一歩も動くことなく、法身大日如来のような金剛心を持ち、無辺の時を経ることなく佛身たることが出来る我が身である)

このような教えを垂れ、自らもそれを実証された大師なれば仰がないではおられませんし、頼らないではいら

れません。

行くも帰るも

留まるも

われは大師と

二人連れをり



このような同行二人の大師信仰は四国八十八か所を遍路するときだけにとどまらず、日常生活全般でのことであり、常に大師と共にあるという安心感は何ものにも代えがたく心強く有難いことであります。

昭和五十九年に弘法大師御入定千百五十年御遠忌の年、先代が万徳院に修行大師像を建立して報恩謝徳の意を表したことを目の当たりにして、何時の日か当山にも修行大師さまをお迎えしたいものと心に秘めていました。

当時は春秋の二回、お四国巡拝のみならず、西国や坂東などの百観音巡礼、篠栗や小豆島の霊場までも巡拝をさせていたでいており、更に岩国市交通局主催の四国巡拝もお手伝いさせていただいたこともあり、修行大師像をお迎えする機運は抑えがたいものがありました。

幾多のお札所で様々な修行大師さまを拝ませてもらってまいりましたので、私自身が納得する御像をお迎えしたいと、京都の仏具店を梯子したことを思い出します



その台座は伊予石の自然石で大師の真蹟の中から採字合成して御宝号「南無大師遍照金剛」とその右肩に「同

行二人」の文字を添えました。

現在、参道の正面に安置の像がそれです、

真言宗寺院であることを知らしめ大師信者の拠り所ともなる大師像です。

台座の基礎には四国霊場の御砂と般若心経五百余巻が埋納されています。大師信徒の信心の証である。

境内には修行大師建立に先立ち奇特な信心厚き女人一建立の大きな水子地藏尊がありました。だからそれに見劣りするようではいけないとの思いもありました。

後に、ぼけ封じ地藏尊と動物供養観音をお迎えしましたが、水子地藏尊を参考にしたことでした。この四鉢の青銅製の仏像が境内に程よく配置され、寺院の境内の体を為しているのは有り難いことである。

春のお彼岸中でもある三月二十一日が大師御入定の日です。

(当山では旧暦で御影供を営みます。本年は四月二十九日です) 報恩謝徳のお参りをして下さい。

近くして見難きは我が心

細にして空に遍きは我が仏なり

我が仏、思議しがたし

我が心広にしてまた大なり



(秘蔵寶輪巻下)



高野山奥之院弘法大師御廟前奉納御写經 六三九

二卷奉納 岩国市装束町四丁目

福島 松代殿

二卷奉納 岩国市南岩国町二丁目

沖本あつ子殿

一卷奉納 岩国市通津

吉岡 律子殿

(二月十一日、二月十日奉納分)



佛 教 説 話

五六四

☒ 民の苦業は……

在る時、仏は舍衛国の祇園精舎に在りました。仏はもろもろの比丘に告げられました

「その昔、和難という王あり。仁愛の心をもつて国を治めること我が子を愛するが如くであつた。その国は広大で五穀もよく稔り大きな災害もありませんでした。

その国の王は王法をもつて国を統治し人民を哀愍していました。常に父母に孝養を尽くし九親を敬愛してやみませんでした。

また、善をなせば福あり、悪をなせば殃禍があることを信じていました。王は常に自らを誠しめそれは后妃も同様で人民を愛念していました。

しかし、ある時一人の貧者が盗みを為したのです。王はその人に問いました。

「汝はどうして盗みなんか犯したのですか」と。

盗者は答えました。

「私は実に貧困にして自ら生きること難しく、聖王の民心を知りつつ罪を犯しました」と。

王はこれを聞いて盗者を憐れみ自らを恥じたのでした。「民の飢えしはすなわち王たる吾れの餓なり。民の寒さ

は即ちそれは吾れを裸にす」と。

更に続けて

「吾が心は国をして貧者を無からしむるにあり。民の苦業は吾にその責あり。」と。

王は大いに自らを恥じて蔵の珍宝を出して困乏の民に施与したのでした。飢渴の人には飲食を与え、寒さに苦しむものには衣を供与し、また病人には薬を給したのでした。

王はそれでも自らを責めて田園、舎宅、金銭、そして車、牛馬などをも欲する者には施与したのでした。

そして王の思ひは禽獸虫魚にまで及び、五穀、乾し草を好むばかりに与えたのでした。

こうして王の布施を為した後には、以前よりも国は榮え民は仁道を歩むようになりました。

人の財を盗む者も無く、婦女を淫する者もなく、口を慎み悪口雑言する者もありません。こうして人々の悪しき凶愚の心は消滅し、みな仏を信じ法を信じ沙門を信じて善を為せば福あり、悪を為せば殃あるを信じたのでした。

国を挙げて和樂し、鞭杖は行わず、戦器は蔵の中で朽ち、牢獄は繋囚無しとなりました。五穀は豊熟し、民には余財があるようになったのでした。

王は五福を得たのでした。

一に長寿、二に顔華好色、三には徳八方上下に勲じ、四には無病にして氣力充実、五には四境安穩

その国の人民は地獄、餓鬼、畜生に墮す者なく、寿終われば皆天に生まれたという。

仏は沙門に告げられました。「和默王とは我が身これなり。」と。

これを聞いて沙門らは歡喜して去りました。

あとがき

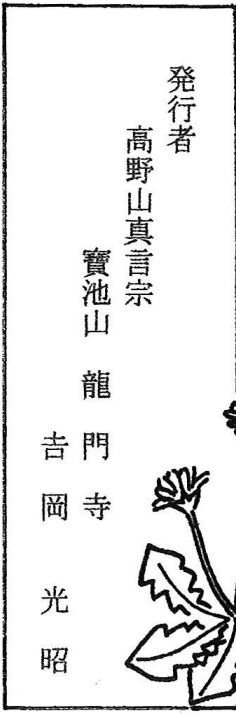
節分立春と過ぎ梅の花も咲いて寒さのなかでも春近しを感じますが、能登半島の被災地は未だ断水も続き日々の生活はもとより復興の見通しもつかないことで、心身の疲れも極に達しておられることでしょう。

スズメの涙ほどの義援金で為すべきことを為し終えたとは思いませんが、政治家の巨額の使途不明金などを聞くときやりきれない気持ちになります。

中東のトルコやシリアでも昨年数万人が亡くなる大地震があつたという。意識のなかにもありませんでしたが、遠い国の出来事は戦争を含めて無関心でいいということはありません。それを老いのせいにするのは罪深いことでもあります。

三月は通津に移り住んで満九年となります。その間万感の思いを込めてみ仏を拝み、檀信徒教化の傍ら宗教学人設立、永代納骨堂の設置などがなり、檀信徒の方々に安心していただける体制が整いつつあるのは、此の地に転住したからのことで、寺の将来に明るいものが見出せるのは嬉しいことです。

今年も桜の開花は早いという。心を弾ませる明るい話題が聞かれる春でありたい。



如何にせん

衆生尽きなん

紛争を

入定大師の

悲願思えば

岩国市通津 3634 番地 3

☎740-0044

高野山真言宗

寶池山 龍門寺 発行

☎岩国 (0827) 38-4611 番